

*Bruce Liu Piano Recital*

# ブルース・リウ

ピアノ・リサイタル

2023年2月21日(火) 19:00開演 ミューザ川崎シンフォニーホール  
7:00p.m., Tuesday, February 21, 2023 at Musa Kawasaki Symphony Hall

主催：神奈川芸術協会 協力：ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)

2023年2月24日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール  
7:00p.m., Friday, February 24, 2023 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

後援：カナダ大使館 協力：ユニバーサル ミュージック

 **文芸庁**  
文化庁 子供文化芸術活動支援事業

**25<sup>th</sup>**  
Anniversary  
Tokyo Opera City  
2001-2023

## Program

### ラモー：クラヴサンのための小品

J.P.Rameau: Pieces of clavecin

優しい嘆き Les Tendres Plaintes 一つ目の巨人 Les Cyclopes 2つのメヌエット Menuets I et II  
未開人 Les Sauvages 雌鶏 La Poule ガヴォットと6つの変奏 Gavotte et six doubles

### ショパン：モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》の “お手をどうぞ”の主題による変奏曲 変口長調 Op.2

F.Chopin: Variations on " Là ci darem la mano " from Mozart's 《Don Giovanni》 in B-flat Major, Op.2

\* \* \* \* \*

### ショパン：ピアノ・ソナタ 第2番 変口短調「葬送」Op.35

F.Chopin: Piano Sonata No. 2 in B-flat Minor, Op.35

第1楽章：グラヴェー〜ドッピオ・モヴィメント 1st mov.: Grave - Doppio movimento  
第2楽章：スケルツォ 2nd mov.: Scherzo  
第3楽章：マルシュ・フュネーブル 3rd mov.: Marche funebre  
第4楽章：フィナーレ：プレスト 4th mov.: Finale: Presto

### ショパン：3つの新しい練習曲

F.Chopin: Three New Etudes (Trois Nouvelles Etudes), Opus. Post.

第1番：アンダンティーノ ヘ短調 I. Andantino in F Minor  
第2番：アレグレット 変イ長調 II. Allegretto in A-flat Major  
第3番：アレグレット 変ニ長調 III. Allegretto in D-flat Major

### リスト：ドン・ジョヴァンニの回想 S.418

F.Liszt: Reminiscences of 《Don Giovanni》 S.418

### ブルース・リウ 2023年日本公演 スケジュール

2/18(土)	[広島]	広島上野学園ホール	主催：広島ホームテレビ
2/19(日)	[札幌]	札幌コンサートホールKitara	主催：オフィス・ワン
2/21(火)	[川崎]	ミュージアム川崎シンフォニーホール	主催：神奈川芸術協会
2/24(金)	[東京]	東京オペラシティコンサートホール	主催：ジャパン・アーツ
2/25(土)	[名古屋]	愛知県芸術劇場コンサートホール	主催：中京テレビ
2/26(日)	[水戸]	ザ・ヒロサワ・シティ会館	主催：公益財団法人いばらき文化振興財団
3/1(水)	[大阪]	ザ・シンフォニーホール	主催：ABCテレビ
3/2(木)	[福岡]	アクロス福岡シンフォニーホール	主催：TVQ九州放送 共催：公益財団法人アクロス福岡

## Profile



### ブルース・リウ(ピアノ) Bruce Liu, Piano

2021年の第18回ショパン国際ピアノ・コンクールで優勝し、世界の注目を集めた後、直ちに世界ツアーを開始し、パリのシャンゼリゼ劇場、ウィーン・コンツェルトハウス、ブリュッセルのボザール、東京オペラシティ コンサートホール、ブラジルのサラ・サンパウロ、ロンドンのフィルハーモニー管弦楽団との共演でロイヤル・フェスティバル・ホールに出演。またワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団とアメリカ・ツアーを行い、ルクセンブルク・フィルハーモニー管弦楽団、ポーランド国立放送交響楽団、NHK交響楽団、ソウル・フィルハーモニー管弦楽団、クレーヴランド管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、中国NCPA管弦楽団とも共演している。

今後はロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団との初共演、モントリオール交響楽団とのヨーロッパ・ツアー、ウィーン交響楽団とのウィーン楽友協会デビュー、さらにラ・ロック・ダンテロン・ピアノ・フェスティバル、クラヴィア・フェスティバル・ルール、ラインガウ音楽祭、エディンバラ・フェスティバル、「ショパンと彼のヨーロッパ」、ドゥシニキ・ショパン音楽祭、グスタード・メニューイン・フェスティバルなど数々の公演、音楽祭への出演が予定されている。

ドイツ・グラモフォン専属アーティスト。ショパン・コンクールのライブ録音を収録したファースト・アルバムはフレデリック賞を受賞。グラモフォン誌のクリティックス・チョイスとエディターズ・チョイスのほか、2021年のベスト・クラシックアルバムに選出されるなど国際的に高い評価を受けている。

「私達が共通して持っているものは、私達がみな違っているということです」と、この若きピアニストは言う。中国人の両親のもとパリに生まれ、モントリオールで育ったブルース・リウの人生は、常に文化的多様性の中にあっただ。ヨーロッパの気品、中国の幾千年の伝統、北米のダイナミズムと開放性——それが彼の姿勢、人格、個性を形成してきた。楽観性と笑顔をもって芸術家の道程をたどりながら、リチャード・レイモンドに学び、現在はダン・タイ・ソンに師事している。

## Program Notes

道下京子 (音楽評論)  
Kyoko Michishita

### ラモー: クラヴサンのための小品

優しい嘆き 一つ目の巨人 2つのメヌエット 未開人 雌鶏 ガヴォットと6つの変奏

ジャン＝フィリップ・ラモー (1683～1764) は、フランス・バロックの作曲家。J.S.バッハと同世代であり、理論家としても知られ、彼の和声論はその後の近代的な和声理論の土台となった。

「優しい嘆き」と「一つ目の巨人」は、1724年刊行 (31年改訂版刊行) の《クラヴサン曲集と運指法第2番》の作品。いずれもロンドで、「優しき嘆き」は第1番でニ短調。緩やかな流れの中から生み出されるシンプルなハーモニーに乗って、メランコリックなメロディが奏でられる。「一つ目の巨人」は第8番。ニ短調のドラマティックな楽想で、さまざまな技巧が駆使され、トッカータのような作風も見られる。

「2つのメヌエット」と「雌鶏」「未開人」は、1727年に作曲された《新クラヴサン組曲集第2番》に収められている。ト調を軸に作曲されており、「2つのメヌエット」はこの組曲集の第3番と第4番。いずれも3声で書かれており、ト長調とト短調で対を成している。典雅な趣を湛え、時おりシンコペーションが織り込まれて拍節感を微細に滲ませている。第5番「雌鶏」はト短調。ラモーのクラヴサン音楽の中で広く知られた作品で、雌鶏の鳴き声を模している。第7番「未開人」もト短調。彼のオペラ＝バレ《優雅なインドの国々》(1735年初演)の第4幕「未開人」の音楽にも引用されている。

「ガヴォットと6つの変奏」は、1728年作曲の7曲からなる《新クラヴサン組曲集第1集》の第7曲で、イ短調で書かれている。主題のガヴォットののち6つのドゥーブル(変奏)が続く。

### ショパン: モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》の “お手をどうぞ”の主題による変奏曲 変ロ長調 Op.2

フレデリック・ショパン (1810～49) は、19世紀前半のポーランドの作曲家。20歳で祖国を離れ、後半生をフランスで過ごした。

ショパンのピアノとオーケストラのための作品は、彼のワルシャワ音楽院時代からウィーン滞在の時期までに集中的に作曲された。「モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》の“お手をどうぞ”の主題による変奏曲」もそのころの創作で、ショパンがワルシャワ音楽院で学んでいた1827年あるいは28年に作曲された。のちに、シューマンは「音楽総合新聞」のなかでこの作品について、「諸君、脱帽したまえ、ここに天才がいる」と高く評価した。

この変奏曲は、モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》のなかのアリア“奥様、お手をどうぞ”を主題としている。序奏のあと、主題が提示される。第5変奏ののちに、ポロネーズを取り入れた6つ目の変奏「アツラ・ポラッカ」が続く。この作品は、彼の初めての管弦楽曲である。また、シューマンの《アベッグ変奏曲》に大きな影響を与えた。

### ショパン: ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調「葬送」Op.35

ショパンは3曲のピアノ・ソナタを作曲した。第1番はワルシャワ音楽院時代の作品で、第2番と第3番は彼の円熟期の創作である。

1839年に完成した「ピアノ・ソナタ 第2番」では、その2年前に書かれた「葬送行進曲」を第3楽章にとり入れている。このソナタにおいて、ショパンは古典派の形式を土台としつつ、新たなピアノ・ソナタの世界の開拓を試みたが、作品についてローベルト・シューマンは困惑したような批評を記している。

第1楽章 グラーヴェ～ドッビオ・モヴィメント 変ロ短調。重々しい導入ののち、掻き鳴らされるような分散和音に導かれて第1主題が現われる。第2主題は変ニ長調の優美な楽想。

第2楽章 スケルツォ 変ホ短調。右手の同音連打と、左手の上行音階の醸し出す不気味な楽想に始まる。トリオでは変ト長調に変わり、讃美歌のような澄明な表現。

第3楽章 マルシュ・フュネーブル 変ロ短調。低音部の荘厳な和音は、葬送の鐘のように鳴り響く。

第4楽章 フィナーレ: プレスト 変ロ短調。両手のユニゾンによる三連符は、一陣の風のように駆け抜けていく。

### ショパン: 3つの新しい練習曲

ショパンは、それぞれ12曲からなる「練習曲集」作品10と作品25のほかに、「3つの新しい練習曲」を作曲している。1839年に作曲されたこの練習曲集は、翌年に刊行されたモシュレスとフェティスの編纂した「練習曲集 (Methode des methodes)」のために書き上げられた。

第1番 アンダンティーノ ヘ短調。ほの暗い雰囲気を持った練習曲。2分の2拍子で、左手によって大きく描かれた八分音符による分散和音と、右手の四分音符による三連符が微妙に重なり合う。

第2番 アレグレット 変イ長調。音のなめらかな運動が印象的。左手が八分音符を刻むなか、右手は八分音符による三連符を奏でる。右手の上声部のメロディに対し、左手のバスの音とその対旋律を奏でる。

第3番 アレグレット 変ニ長調。ワルツを連想させるような典雅な趣の練習曲。舞曲のように跳躍する左手の上で、右手はレガートによるメロディと内声のスタカートと同時に弾き分ける。

### リスト: ドン・ジョヴァンニの回想 S.418

フランツ・リスト (1811～86) は、ハンガリー王国ライディング生まれ。1822年にウィーンでツェルニーに師事したのちにパリへ赴くも、外国人であることを理由にパリ音楽院への入学は認められなかった。しかし、早くして彼はピアニストとして国際的に活躍していく。

「ドン・ジョヴァンニの回想」は1840年作曲。当時はオペラのピアノ編曲版が人気を博しており、モーツァルトのオペラのメロディを用いたこのパラフレーズも、ピアニストとしてのリストの重要なレパートリーであった。

作品は、ドン・ジョヴァンニに殺された騎士長の像による“お前の笑いも夜明けまでに終わるだろうよ”(第2幕)に始まる部分、続いて“お手をどうぞ”を主題として展開する部分、そしてドン・ジョヴァンニのアリア「シャンパンの歌」が繰り返りひろげられる部分からなる。